

構造と移ろい——縁の詩学

尼ヶ崎彬（学習院女子大学）

歩行に形式を与えたものが舞踊であるように、文章に形式を与えたものが詩だとヴァレリーは言う。では詩の形式とはどのようなものか。まず一行あたりの音節数が固定される。5とか7とか10とか。次に強弱や長短などによるリズムパターンが指定される。さらに行末の音が反復されたりもする（押韻）。これらの効果は、聞き手にとって同じ特性をもつ音響フレーズが繰り返し知覚されることである。ヤコブソンはこれを「並行性」と呼び、世界共通の詩の統語原理とみなした。並行性が意味に見られる場合は対句となる。いずれにしても、聞き手（読者）はそこに整然とした反復構造を知覚し、それがアーティフィシヤルな所産であることを感じる。ちょうど西洋の幾何学式庭園のように。

しかし日本の短歌は五七五七七という音数パターンを規則としている。一行あたりの音数が違い、上の句と下の句の音数も違う。並行性はない。むしろ、あえて並行性を避けているとしか思えない。では日本の和歌には五七五の音数以外に統語原理はないのだろうか。少なくとも古典和歌にはあった。詩的言語はただ意味を伝えるだけでなく、文法以外の独自の統語規則によって構築されなければ詩らしくないのだ。

和歌が採用したのは、統語のさいに反復構造という全体枠をはめることではなく、単語と単語の間に微細な引力を生じさせて、言葉を結合する原理とすることだった。それは「寄合」とか「寄せ」と呼ばれることもあるが、ここでは「縁」と呼ぼう。縁には二種類ある。意味の関連性による「縁の詞」と音の同一性による「縁の字」である。今で言う縁語と掛詞にあたる。その単純な例は、互いに無関係な景物と趣意とを「縁の字」で繋ぐという方法である。たとえば

敷島の和にはあらぬ唐衣ころも経ずしてあふよしもがな 紀貫之

この方法はやがて複雑な言葉のモンタージュを構築するようになる。たとえば

来ぬ人をまつほの浦のゆうなぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ 藤原定家

この歌が朗詠される時、聞き手が経験するのは、あたかも船で川下りしつつ光景の変化を楽しむような感覚である。しかも次々と変化するイメージが単語間の縁によってオーバーラップし、入れ代わり、既に消えた言葉と響きあう。言い換えればそれは、予期せぬ移ろいを、驚きつつも一種の運命的必然として受けとめることである。これをさらに大規模にしたのが連歌であった。それは鎖のように接続する句の間には密接な縁があるが、二句離れるともう何の関係もない。

構造の規則は全体を規定する。聞き手は予期したパターンを確認して安心する。しかし移ろいの規則は変化に驚きたいという欲求から来ている。ただし変化が偶然に任され新要素が雑然と出現するのでは、人は驚かない。その移ろいが必然であるために、言葉と言葉は縁によって結ばれていなければならない。これが縁の詩学である。